
クロガネのi アイ

徒花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロガネのi アイ

【Nコード】

N4352I

【作者名】

徒花

【あらすじ】

それは切ない恋物語。

それは、あまりに突然だった。

世界から音という音が消えたかと思うと、視界はコマ送りのように見えてくる。背後から貫く圧倒的な白さに振り返れば、そこには光の壁が出来ていた。壁は触れても感触がなくて、次第に、目が焼かれるように熱くなる。途端、耳を聳せんばかりに鳴り響く　悲鳴。それはきつと、声にならない機器達の、切迫した叫び声だったのだ。不慣れなクラクションの轟音に、白光の正体が車体の前照灯である事を知らされた。

そう。全ては一瞬、刹那の時流に起きた事。それでも、僕にとってのこの一時は、ゴムが引き延ばされるように、何倍もの長さを持っていた。猛スピードで突進する巨大な塊と打撃音。痛みが伝わるより尚早く、潰れていく肉の感触が駆け巡る。乗用車と空気の壁は、僕の体を挟み打ちで壊していき、やがて、衝撃が意識を空へと放りだす。星屑一つ見られない漆黒の空が、本当に近い。錯覚だと分かっただけでも、手を伸ばせば届くんじゃないかと思う混沌に、知らず、掌を翳していた。

そして　僕は墮ちる。

路面の染みの一つとなつて。

.....

.....

(……嫌な夢)

朝を迎えて、最初に思った事がそれだった。折角の連休だったのに、夜毎、悪夢にうなされているのでは、目覚めも悪い。白い細腕で目を擦り、足先を床に下ろす。冬と呼ぶにはまだ少し早い気もするのだが、この寒さでは秋と言うよりも完全に冬となっている。カーテンの隙間から覗かれる曇り模様が今日も寒空だと悟らせた。僕は大きな欠伸を手で隠すと、部屋を出て、階段を降りて行った。

リビングでは、父が椅子に腰かけて、新聞を捲っていた。テレビではニュースが流れ、トースターにはパンが刺されている。僕はテーブルを挟んで父の正面に腰かけると、両肘をつき、掌に顎を乗せた。やや大きめの椅子で、足をパタパタと泳がせながら、テレビを見る。

「ねえ、アレってお父さんの研究所で作ってるんだよね？」

突然の問いかけに、父が顔を上げる。僕は片方の掌を離すと、テレビの方向を突つづいた。薄型の液晶画面には、最新のロボット工学の研究成果とその試作機の製作が報道されていた。

「精巧なヒト型ロボットって、どのくらい似ているの？」

一瞬、父の表情に沈痛な色合いが覗かせた気がした。しかし、それは本当に短い間の出来事で、今の自慢げな父の顔を見ていると、影

は見る見るうちに消えていく。気のせいだったのだろうと、僕は思った。

「そうだな。最新のE-6型では、人の目では区別できない所までなら再現出来るな」

「そんなに！？ 病院の看護用ロボットとかは、いかにもロボットって感じなのに……」

「物事には目的があるのだよ、ヒカル。看護用ロボットにとって容姿はオマケみたいなもので、機能性の方が大事だからな」

「ふーん。じゃあ、精巧な容姿のロボットの目的は何なの？」

「それは何だ 父さんは作るのが専門だからな。目的はよく分からない」

父は苦笑いして、席を立った。どうやら、トースターに入れておいたパンが焼けたらしい。焦んがりとした匂いに、父の取り出したマーガリンの風味が重なって、食卓は温かみに包まれた。父はトーストを一枚かじりながら、僕の分をティッシュに乗せる。

「いつもすまないな」

「いいよ。お父さんはお父さんで、頑張れる事を頑張ってるんだから」

僕の家では、いつも朝はパンと決まっている。昼ご飯は給食で済ませ、晩はレトルトか、外食。手料理が殆どないのは、父は研究で多忙だから。母が亡くなってからの生活は、どこか質素でほんの少し

だけ物足りなさを感じるが、別に不満ではない。ただ、食卓で開いた唯一つの空席を見ると、今でも胸が痛くなる。

食事を終わると、僕はハンガーに立てかけてあった制服に手を伸ばした。中学入学当初はまだ大きかった制服も、2年にもなると、大分馴染むようになった。母が言っていた事は本当で、中学生になると、男子は急に背が伸びるようだった。それでも僕はまだチビだけだ。

と、その時、家のインターホンが澄んだ音を響かせた。

「ヒカルう。学校行くよ」

この声はナオだ。僕は急いで歯磨きをすると、鞆に授業道具を詰め、玄関に向かう。忘れ物がないか最終確認を済ませ、靴を履いた。

「お父さん。行ってくるね」

ここで、催促のインターホン。僕は父の返事を待たずに向き直ると、玄関横に飾られた写真に微笑みかける。

「お母さんも、行ってきます」

ドアを開け、肌寒い外へと乗り出した。

「ヒカル、遅い！」

「ゴメン。でも、ナオが早いんだよ。待ち合わせまで、まだ10分もあるじゃない」

「あれ、そうだったけ？ まあ、気にしない。気にしない。さ、行こっか」

そう言つて、ナオは歩きだした。触角のように飛び出した髪の毛が上下に揺れる。僕はリュックの両腕を引っ張ると、小走りで彼女に並んだ。何とも情けない事だが、僕の体は彼女よりも一回り小さい。それは何も、ナオが大きいわけではなく、単に僕が小さいのだ。いつの日か、彼女よりも大きく成長する事が密かに僕の目標だった。その為に、毎日牛乳も飲んでるし、早く寝るように心がけている。今、こうして見上げなければいけない蟠りを、いつの日か、彼女にも　それが、いつも僕を振り回す彼女への、ささやかな抵抗だった。

「ねえねえ、今度のロボットのニュース見た？」

「ロボット？　それって、ヒカルのお父さんが作ってるやつ？」

「うん。今度ののは凄いいんだって、お父さんが言ってたんだ」

「へえ〜。じゃあ、ヒカルのお父さん、またテレビに出たりするんじゃない？」

「きつと出るよ。本当に凄いいよね」

僕は父を尊敬していた。それはつまり、ロボットが大好きという事でもあつて、僕はきつと将来の自分を今の父と重ねていた。未来にはまだ無限の可能性があつて、それでも、いつかはなりたいものがある。身近な目標は漠然としていたけれど、将来を考えると、心が躍った。

「それにしても、世の中、便利よねえ〜」

「何？ 急に」

「だってさ、ヒカル。40年も前にはロボットって、まだ犬とか猫しかなかったのよ？ 想像できる？ 老人の介護も、食器の洗浄も、きつと誰かがやってたって事でしょ？ それに ほら、あそこ。あのビルの建設だって、現場で誰かが指揮を取らなきゃいけないわけ…… 大変だったんだろっちなあ」

ナオの大きな碧眼が街並みに過去の様子を重ねていた。

確かにそうかもしれない。ロボットがないって事はその分、色々な事を自分でやらなきゃいけないわけで、教科書で習った月の探索も、多分、人の手で行われていたのだ。今の僕達には違和感が残るが、それでも、昔の人にとっては、それが当たり前だったのだろう。

今は昔とは違う。

車道と通う乗用車に、騒音なんてないし、学校の先生が言ってたみたいに、環境汚染も存在しない。タイヤもなく、磁気浮上式のリアモーターで、来年には衛星管理による運転の全自動化も行われる予定のはずだ。そう考えると、昔がどれほど不便な毎日であったかは、想像できない。

「まあ、きつといつの時代も、15歳は勉強嫌いで溢れ返ってたんだろっけど、さ」

もっともな事を言うナオに僕は勢いよく同意する。しかし、それを露骨に出してしまうのもどうかと思うので、ここは曖昧に笑って返答した。

と、ナオが立ち止まる。夕陽の様な鮮やかな髪がゆつくりとたなびき、遅れて立ち止まった僕には、彼女の横顔しか見えなかった。健

康そうに艶のある肌に、ほんのりと紅が射す。次第に、顔が興奮していくのが、僕は直ぐに分かった。そして、体を強張らせる。新しいオモチャを見つけた様な幼げな表情は、いつも僕を連れまわす時のものだった。

「ヒカル、ヒカル！ このビルの間って、通れそうじゃない？」

「ナオ？ ……一応聞くけどさ、ここ通って行くことか考えてない？」

横に視線を流すナオの目には、この道がどれほど華やかに見えているのだろうか。少なくとも、僕の目には、それほど魅力のあるものではないように映る。浄化されたような街中で、清掃ロボも通れない道幅は、殆ど、僕らが蟹歩きをして通れる程度だった。当然の如く、そこにはゴミが吹き溜まり、向かいの道までは大分ある。ただそれは、おおそナオの心をくすぐるものにすぎない事も、僕は15年と言う歳月の中で知っていた。恐る恐る訊ねるも、返答は火を見るより明らかだ。

「さっすが、ヒカル。うんうん、よく分かってるね。じゃあ、行くっか」

言うが早いか、ナオは僕の背後に回り込み、学校指定のリユックごと僕の体を押し始める。何だかんだ言っつて、こう言う場合、先頭は僕の役目になる事が、お約束だった。

「ちよ、ちよっと待って。今日は、学校もあるし」

「だから行くこうつて言ってるの。ほら見て。方向的にも、学校の方向でしょ？」

ナオは昔から変な所があった。何と云うか、個性を強調したがる夕子なのだ。他人のしない事、他人とは違う事に、強い関心を持つ。黙っていれば可愛いのに、ナオがその個性を發揮する時、誰もが可憐な少女に不思議少女のレッテルを上乗せする。個性の追求が破滅に向かう事など、日常茶飯事だ。だから、これもきつとその延長線。他人の通らない道には、彼女にとって、ひどく魅力的だったのだ。

「止めようよ。ナオがそうやって成功する例って殆どないじゃん」

「いいから、いいから。それに今日は少し早めに出てきたわけだし、きつと大丈夫」

「それって、ダメ元」

「問答無用！」

ナオは僕の体を隙間に押し込んだ。リュックを背負ったままだったので、体はかなり窮屈であったが、戻ろうにも退路はない。直ぐに入り込んだナオが完全に道を塞いでしまった。今ならまだ間に合うかもしれない。思い立って、ナオの説得を続けたが、駄々をこねる子供のように彼女は全く折れなかった。仕方なく、僕は逆側の光を目がけて歩いていく。制服が擦れて動き、僕は慎重に足を進める。その時、ふと思う所があった。

「……動かない」

「え？ ヒカル 冗談、だよな？」

僕らが学校に着いたのは、2時間目のチャイムが鳴ってからの事だ

...

.....

つ
た。

今は昔とはすっかり変わっているだろう。けれど、変わらないものも中にはある。授業中のおしゃべりや先生の説教。給食もまたその一環だった。クラス中の席が埋まり、委員長の手合で食べ始める。まず最初に、数量限定のおかずがなくなっていく、食べ終えた人から、残りを貪っていく。それでも、先生の目を盗んでは不正が行われていくもので、決まって、僕は弱者の立場にいた。

「おい、ヒカル。お前、これいらなんだろ。俺がもらってやるよ」

「あ……」

それは僕が最後の楽しみに取って置いたものだった。隣の席でもないので、クラスメートの杉田はいつも僕の元に寄ってくる。そして、今のように僕の好きなおかずを攫って行ってしまふのだ。それを拒もうとしても、僕にはそれが出来ない。呆然と、取られていくおかずに見惚れていると、「何だ？ 文句あるのか？」と脅迫にも似た声をかけられ、口が閉ざされてしまう。僕はただ悔しさを噛み締めている事しか出来なかった。

「ちょっと杉田くん。ヒカル嫌がってるよ。返しなよ」

それはナオの声質だった。珍しく眉を寄せて、怒り気味の口調が心に響く。見かねたナオが僕の変わりに講義を申し立ててくれたのだ。それは安堵と共に、自身の情けなさを知らしめて、胸の中を満たし

ていた。

「どうしてそんな事が分かるんだ？ ヒカルは文句がないって言ったんだ。そっだよな、ヒカル？」

杉田は穏やかに笑って訊ねたが、目は笑っていなかった。獰猛な野獣の様な鋭い目つきに、僕はビクリと体を震わせる。やっぱり、首を縦に振るとこしか出来なかった。

「杉田くんが、そうさせてるんでしょ？ ヒカルの事は、私が一番知ってるんだから」

「それこそ変な話だろ。言わなきゃ何も分からない。ヒカルは知らないって言ったんだから、それでいいだろ」

「言ってるじゃない！ 首を動かしただけ！」

張り上げた声に、一瞬、教室を静けさが支配する。異変を悟ってか、担任の先生が立ち上がった時だった。目の前に立っている二人の顔が形相のまま声を荒げる。

「言え！ ヒカル、お前、いらなんだよな」

「ヒカル、本当の事を言って！」

「僕は」

周囲の視線と、二つの怒号が胸中を反響する。羞恥と緊張に僕は俯いてしまった。頑なに閉ざされた唇が、震えている。複雑に絡まった感情に、僕は今、自分がどう思っているかも分からなかった。悔

しいのか、悲しいのか、それとも怖いのだろうか。おそらくは、その全てなのかもしれない。ただ、その言葉の続きを僕が言う事はなかった。

放課後。

給食の時の一件もあってか、僕の心には大きな蟠りが生まれていた。本当は、嫌だった。あの時、僕は素直に自分の言葉を言うべきだったのだ。けれど、今はもう遅い。後悔は、文字通り、いつも後からやって来る。どうにもできない感情が過去の時間に残滓を刻んでいた。自分の弱さをこれほどに悔しいと思った事はない。でも、ダメだ。脳裏に呼びかければ直ぐに蘇る、無音の重圧を考えると、胃の中の含有物が込み上げるようだった。結局、僕は今の僕を変えるより他に術がないのだ。でなければ、きつとまたナオを傷つける。

「ヒカル〜。帰ろー」

一足先に荷物の整理を終えたナオが僕の元に駆け寄ってきた。それは先の事など全く感じさせない様な、いつも通りの口調であった。明るくて、可憐で、優しくて。

よくよく考えると、何でナオは僕の事なんて庇ってくれるのだろう。ナオは僕と違って人気もあるし、友達も多いはずだ。別に、僕なんかに構わなくても。そうか。きつと逆なのだ。僕がナオの重荷になっっている。そうに違いない。

「ゴメン。今日は美術部の活動に行くよ。仕上げたい作品あるし」

「作品って、前に言ってた、傑作になりそうって言う絵画？」

「……うん。そう」

「そっか。じゃあ、仕方ないね。頑張つて」

何処か寂しげな表情を残して、ナオは僕の前から去って行った。そう、きつとこれでいい。僕にナオの笑顔は眩しすぎるから。その照りかえる太陽に雲が射してしまうなら、僕はゆっくりと消えていこう。誰もいなくなった教室に、小さく音が響いていく。それが自分の嗚咽であった事に、僕は暫く気付けなかった。全く分からない。まるで、自分の心と体が別になってしまっているようだ。何で、こんなに胸が痛いんだろう。何で、僕の涙はこんなにも、冷たいのだろうか。

落ち着きを取り戻すと、僕は美術室を訪れた。基本的に美術部の活動は個々の判断で行われ、あると言えば毎日あるし、ないと言えば全くない。それでも、ナオに嘘を吐いて帰らせたと思うと、胸が苦しくなるので、今、此处にいる。僕は準備室に置かれていた包み張りキャンバスを持ってくると、土台に固定して、自分もまた腰をかける。

絵は描きかけであった。朝日の昇る海岸に、一人の少女。髪が潮風に揺られて、その顔は僅かしか覗かせない。やや後ろから少女を写すアングルは、それでも少女の可憐さと柔軟さ、またその裏に隠された決意にも似た強さを浮き彫りとしていた。それはまだ完成には程遠いものだったが、渾身の一作を予感させる経過の良さだった。僕しかいない美術室に、足音が木霊する。パレットに色を置いて、僕は再び絵画に向き直った。

陰鬱な気持ちと温和な感情が入り混じる。これは ナオなのだ。心の中に思い描き続けていたナオの姿を神秘的な世界観で包み込んだものにすぎない。理想の少女は僕の世界で凛々しく生きているのに対し、現実では、華麗な花の周りには雑草が生い茂っている。僕が余分な栄養を吸い取ってしまうために、ナオは目一杯に花を咲か

せずにいた。その反動が、僕を苦しめる。

(ナオ……)

僕は一度、瞼を閉じ、また開けた。自然と、筆をキャンバスに向ける。キャンバスに描かれた下絵を見れば、何処をどう変えるかは、おのずと分かって来る。もっと、少女を可憐にしたい。もっと瞳を未来に向けたい。思えば、それは形になる。絵画の中で、世界は僕そのものだから。

しかし

(……え?)

筆は一向に進まなかった。僕の体は蛇に睨まれた蛙のように、動くと言う事を忘れていた。浮かばない。そう、頭に何も浮かばないのだ。今までにないくらい、鮮明に、そして、細部まで捉えられるキャンバスの全容。後は、足りない部分を空想し、そのままに描くだけだった。なのに、それだけなのに

(どうして?)

僕の頭は空っぽだった。それは創ると言う事を、忘れている感覚ではない。寧ろ、神様が僕を作る時に、空想すると言う事を備え忘れた様な感じだった。忘却ではなく、消失。僕は、何も作り出せない事に疑念こそ覚えたが、不思議とそこに違和感はなかった。どうしてだろう。ただ、いつもと違う自分に戸惑いが隠せなかった。

僕は無心のまま膠着する。そして、気が付けば、下校を告げる鐘が鳴っていた。灰色の空は朱に染まり、黄昏が地平線の向こうに落ち

ていく。美術室の扉が轟めきながら滑りだし、顔を覗かせた先生は驚嘆混じりに声を漏らした。

「ヒカルくん、まだ残ってたの？ 下校時刻だから、早く片付けて帰りなさいね」

僕は一体、何時間、キャンバスに向かって筆を突き出していたのだろう。顧問の先生は、訝しんだ様子で扉を閉め、また遠ざかって行った。

夕暮れの美術室を再び沈黙が立ち込める。僕は、こんな日もあるのかな と、強引に自分を納得させ、帰りの支度を始めた。筆をキャンバスに預け、綺麗な水が浮かぶ筆洗に、漠然として目をくれる液面に浮かぶ自分と絵画の少女の間を、視線が行き来していた。僕は、やりきれない不可思議さを残して、キャンバスに手をかける。

と、その時、指先を鋭い痛みが駆け抜けた。咄嗟に僕は、指を引く。布地を固定していた止め金が、僅かに突き出ているのを忘れていた。電気が走るような感覚に、指を口の中へと放り込む。粘り気のある体液が広がって、痛みが閑散していくようだった。

僕は口を離して、指を見る。

……血が、青い。

立て掛けられた機械時計が、一つ小さな足音を響かせた。下校時刻に伴って、学校は喧騒に包まれる。そんな中、弾ける水の音などに誰が気付く事と言うのだろう。倒れた筆洗と床に染み入る水溜めにキャンバスは、ゆっくりと墮ちていく。画板が面して飛沫を上げた時、僕は教室を駆けだした。

⋮

⋮

世界が遠くに消えていく。このまま胸が潰れてしまっんじゃないかと思うくらい、僕の心は血も流す勢いだった。当てもなく街を彷徨い、何度も指先を眺めては、また戻す。頭の中を掻き乱す疑念は、一点に集約されていた。心音は鼓膜を突き破るように、激しさを増して行き、呼吸さえも苦しくなる。乾ききった口は、もう何も感なくなっていた。

(……どう、して?)

青い、青い、濃青の血液。それは、惑う事なき自分の一部だった。ドロドロに溶け出した液体は、蛆虫の様でもあり、蛇の様でもある。単純な同一色ではなく、内部には碧色や白濁色の部分も見受けられた。一見して、それは入れ替える直前の筆洗水を思わせる色合だった。不浄で、禍々しくて、混沌としている。

けれど、僕はそれが何かを知っていた。だからこそ、こうして街を彷徨う事しか出来ないのだ。分かっている。でも……それは、あまりに

瞬間、響くクラクションと前照灯。

全てを呑みこむ光の壁が、僕に事実を想起させる。

本当にそれは 残酷だった。

僕は……もう死んでいたのだ。

5日前、連休、僕は父と共に休日をごすごしていた。無理を言って、休みを取ってもらったのは、その日が父の誕生日であったからだ。僕は前もって貯金箱からお金を出し、意気揚々と買い物に出かけた。こっそりと溜めていたお金を使って、父を喜ばせてあげたかった。ケーキを買い、真新しいネクタイを包みに入れて、僕は父の待つ自宅へと帰っていた。

その時、白の乗用車が路を外して向かってきた。何も無い空間だと思っていた所に、光を伴った大きな壁が聳え立つ。僕にはコマ送りのようにさえ見えたが、車がどうしようもないほど猛スピードである事は瞬時に理解できた。フロントガラス越しに運転手と視線を結ぶ。彼は大きく目を見開いて、ハンドルを切ろうとした所だった。

僕は、父へのプレゼントであるネクタイと、一環のショートケーキを抱え込み　轢かれた。

微かに左腕を掠めながら、乗用車は僕の隣を通り過ぎて行った。裂傷は青色に埋まる。僕の頭は霞がかかったように混濁し、世界中が回転世界のように見えていた。揺れ動く視界の中で、嘔吐感が込み上げる。それでも、気が付けば僕は家の前にいた。半開きの意識を持ち直し、重苦しい自宅を見る。それは陰鬱の結晶のようにさえ感じられた。家の扉は温度を持たないように熱がなく、それは寧ろ、絶対零度の冷たさよりも恐ろしかった。

僕は扉を開ける。既に父は帰宅していた。一体、僕はどれほどの時間を彷徨い歩いていたのだろう。街を媒介として、ヒトの世界を放浪していた。まるで、自分がなくしてきた、人の温もりを捜し求めるように。

足音が忙しくなく、僕を迎えた。慌てた様子が次第に近づいて、リビングに通じる廊下から、焦慮に駆られた父が覗かせる。父は僕を見

るなり、叱りつけようと顔を強張らせたが、左腕に視線を流すと、直ぐに顔を硬直させた。

「お父さん」

僕は、それしか言えなかった。

部屋のベッドに横たわり、僕は体を丸めた。電気も付けず、締め切ったカーテンは、まるで、充滿する暗闇を捕縛しているようだ。音もない無限の闇に、僕の体を蹂躪していく。でも、それでいい。呼吸の音も衣擦れの音も、全ては僕が誤って持ってきてしまったものだ。それを元の世界に返す事は正しい事だと思う。僕に光はいらない。闇だけでいい。僕はもうヒトではないのだから。

父の独白は、暗く虚ろな声だった。内容も整頓されておらず、それは回帰した感情をただ羅列しただけの様に思わせた。それでも、その言葉は一つ一つは、確実に僕の心を突き刺して行く。ダーツの的にでもなった気分だった。緊迫の中、父は初めから中心に向けて矢を放つ。

「…………耐えられなかった」

父が涙を見せるのは、実に5年ぶりの事だ。脳内の記録では、それは母が亡くなった日と一致する。その時の想いも、今の心情も、他者の僕には分からない。人ひとり救えないで何が科学だと　その日、父は言った。

今、貴方は満足していますか？
今、貴方は歡喜していますか？

今、貴方はそこにいますか？

問い掛けに、答えはない。罪の告発から、自白は続くばかりであった。家族を失いたくなかった事。僕をロボットにした事。日常を維持するため、僕の記憶を改竄した事。静涙する父は、今まで見てきた中で一番小さな存在だった。薄闇に溶けてしまいそうなくらい不明瞭に見える。そんな父を、僕は黙って見据えていた。無心な瞳を真っ直ぐに。そして、僕は階段を上がって行った。

僕はロボット。機械。作りもの。人工的。ならばきつと、僕のこの想いも偽りのものなのだろう。1と0の数式が呼び起こす条件反射に過ぎない。不安も、悲哀も、命でさえ仮初の僕に、一体、どこに本物があると言うのか。あるはずがない。だからこそ、僕は絵画を完成させる事ができなかったのだ。彼女に対する僕の想いは虚実のものに過ぎないのだから。枕を口に押し当てて、父の前では我慢していた悲鳴を上げた。

.....

.....

その日から、僕が学校に行く事はなくなった。永遠と部屋の薄闇に身を潜め、相克する日常と言う螺旋を、ただ外から眺める。それは人の世界だ。平凡でもかけがえのない毎日が渦めいて、儚き人の夢

が漂流する。誰かに僕の存在を知られるわけにはいかなかった。人の世界に、ヒトを模した怪物が混ざっていると知れば、途端、僕は排除される。それは仕方のない事だ。だから、僕は世界を見る。はみ出してしまった、夢の続きを。

(……お母さんは、それでも、生きていたかった?)

窓から眺める路中に、子供連れの親子がいた。本当に幸せそうな顔をしている。僕はどうなのだろう。精巧に作られた僕は、魂などなくとも、確かなヒカルを演じられるのだろうか。いや、演じられたとしても、それはもう今までのヒカルとは違う。ヒカルはもう死んでいるのだ。ここにいるのは、模倣された肉体と記憶とを併せ持つ、ただの機械。僕はもう誰でもない。

(……お父さん、何で、こんな)

僕は泣いた。この涙も感情も、全てが偽りのものだと分かっている。僕も、それを止める事は出来なかった。僕は、ヒカルでいたい。でも、それはもう叶わないのだ。夢は目覚めてからは見られない。胸が苦しくて、押し潰されるようだった。作りものの感情で、どうしてこんなにも辛いのだろう。どうして痛みばかり感じるのだろう。いつその事、空っぽの蛹人形になりたかった。迫害される世界に迷う事もなく、夢に想いを馳せる事もなく、ただゆっくりと世界に溶けていく。そんな　薄っぺらい存在に。

「ヒカル」。学校行くよ」

家の中で電子音が虚しく響く。それに応える者は、この建築にはいなかった。あれから、父がどうなったかは分からない。けれど、毎日、決まった時間に鳴らされるインターホンに、きつとまだ薄闇を

共有しているのではないかと思う。もしかしたら、誰もいない世界で、まだ自白を続けているのかもしれない。

「ヒカルってばあ〜」

あれから何度も、空が染まり替わるのを見てきたが、一度として、ナオが僕を気に掛けない日はなかった。雨の日も、晴れの日も、変わらずにナオは訪れる。朝、登校ギリギリの時間まで僕を待ち、学校が終われば、日が暮れるまでそこにいた。視線は離れる事もなく、僕の部屋を見つめている。閉まりきったカーテンに、その立ち姿が映し出される事はなかったが、それでも分かる。僕にしか聞こえないような周波数で、心の声がカーテンを突き抜けていた。

ねえ、どうして出てこないの？

ねえ、何があったの？

何か言って。

彼女の声は音にならないまま、直接に想いだけを届かせる。それが、どれほど僕を苦悶させるか、彼女には分からないだろう。僕はもう夢とかかわる事を止めたのだ。ヒカルを演じる事を止めたのだ。願わくば、このまま鉄塊となり、体で廻る歯車を全て停止させてしまいたい。だからこそ、僕は行かなければならないのだ。心を落ち着かせて、数日前から準備していた紙面を見る。大丈夫。きつと上手くやれる。

僕は、意を決して、部屋の扉を開けた。重量感のある音を響かせて、階段を下っていく。家の中は、余す所なく薄闇が支配していた。絶望に彩られる建築を、僕はただ、歩く。素足のまま玄関に踏み入ると、静かに扉と向き合った。沈黙。この薄い壁の向こうには、きつと彼女がいるはずだ。僕は、これから彼女と告別する。そう思うと、本当に居たたまれない気持ちになる。僕は切なさに瞳を伏せ

た。

「ナオ」

「ヒカル？ 本当にヒカルなの！？ よかったあ。電話も出ないし、何かあったんじゃないかって、凄く心配したんだよ？ ちゃんと、学校休む時には言つてよね。先生に何て言えばいいか困っちゃうし。それで、今日は学校行くんだよね？ 早くしないと遅刻だよ。急げ、急げ！ …………… ヒカル？ ねえ、聞いている？」

溜めこんだ言葉を吐き出すように彼女は言葉を連ねたが、僕は微動だしなかった。間に挟まれた一枚の壁は、世界の隔てり。人とヒト。光と影。真と偽。そう言つた決して交わらない理が、たった数センチの厚みで違えている。素足の先を伝つて、冷たさが体を上つていく。足は地面に張り付いたように動こうとはせず、足の裏から根が生えて、僕自身が冷たさに同化していくような感覚があつた。

「もう、学校には行かない」

「え？」

「ナオとも 逢わない」

拒絶するヒカルを抑えて、言つた。

「嫌い。もう来ないで」

僕は、ちゃんと言えただろうか。声は震えていなかったか。棒読みになつていなかったか。静寂の中、僕は部屋から持ち出した紙面を見る。何度も消しては書いた跡が残っており、メモは廃れて見づら

かった。でも、言った台詞に間違いはない。

「ウソ」

「嘘じゃない。もう嫌なんだ。何もかも。辛いんだよ」

書かれた予測には、その言葉も記載されていた。彼女が嘘だと疑った時の用意だった。

「ドアを開けて」

「嫌」

「どうして？」

「逢いたくないから」

機械的な会話が進んでいく。僕は胸が締め詰められる思いだった。この空虚な胸中で、一体、何が痛むと言うのだろうか。故障しているのではないだろうか。いや、おそらくそうなのだ。きつと一つの存在としては、僕は今、あまりに不安定なのだ。感情が、一つとして完結する事を拒絶する。それとも、拒むのはヒカルなのだろうか。僕には分からない。

「分かったでしょ？ 嫌いなんだ、ナオの事」

僕は手に持った紙面を折りたたんだ。

「もう学校行きなよ。遅刻するよ」

それが二人を裂く、最後の言葉。

ナオは僕とは違う道に行く。歩き出せない僕など置いて、もっと先に行くべきなのだ。本当はもっと昔から、そうすべきだった。けど、意気地無しは僕は、その後の自分を保身するあまり、長い間、彼女に重荷を背負わせ続けた。でも、それも終わる。

ヒカルはもう死んだ。枷はもう外された。その事を諭すのが、今の僕に与えられた最後の使命だった。彼女が夢の世界へ歩いて行くのを見届けて、僕は完全に姿を消そう。手にした紙に雫が落ちて、小さく滲んだ。

「……待ってる」

「え？」

メモの何処にも記述されていない言葉に、頭が乱される。それは僕の知るナオが言うべき言葉ではなかった。想いはどうあれ、このまま学校に向かうのが、正しいナオの姿である。なのに

「私、待ってるから。ヒカルが出てきて、その事を言ってくれらるまで、ここを動かない」

彼女の言動が理解できない。何を言っているのだろう。僕は出て行かない。もし仮に出て行ったとしても、何が変わると言っただ。僕は低温のヒカルと言う演技を維持したまま、言葉を返す。

「そんなの、意味ないよ」

「ある！」

「どっしって？」

無機質な音が扉を貫く。僕はヒカルの中に僕自身の冷たさを織り交ぜて、声を発した。早く、この場を立ち退いてくれ　そんな想いが僕の胸中を締め付ける。

扉は、そのまま一拍の沈黙となった。世界から一切の音がどこかに吸い込まれ、消えていく。僕の耳には、何もなくなつた。ただ、見つめる扉には隔絶された闇の裂け目が覗かせる。小さな覗き穴の向こうには、光と共に、彼女の姿が見えるはずだ。差し込む光が瞳を照らし、微かな声が彼を呼ぶ。

「ヒカル　きっと泣いてる」

それは優しく、儂く、悲愴に満ちた音だった。

「そんな事、ない」

「じゃあ、姿を見せて。そしたら、諦める」

大丈夫。僕は泣いてなんかいない。声も震えてないし、頬を伝う冷たさも感じはしないのだ。これで、ナオが諦めて、僕を忘れてくれると言うならば　僕は出よう。ただ一度だけ。それがきつとヒカルの最後に望んだ事だから。

「これで　いいの？」

重々しい扉を開けて、光の中へ踏み入れる。ナオは分かっているか。僕はもう人じゃない。ロボットだ。機械は泣かない。作り物の感情を持っているとしても、そこに泣く為の機構は存在しないから。

「ヒカル……」

彼女はそれきり黙った。何と言葉をかけるべきか戸惑っているような瞳が、真っ直ぐに向けられる。彼女は今にも泣きそうだった。僕は自分の平然とした態度が演技である事を知っている。けれど、演じられた無機質さは、機械故の完全さを持ち合わせていた。感情を消された表情は、さぞ恐ろしく、拒絶的なものに映る事だろう。

ナオは目を伏せると、髪をなびかせながら顔を背ける。踵を返した時、空中で煌びやかな液体が光を反射していた。走り去る彼女の背中中は小さくて、僕は、今までヒカルを守ってきたくれた背中が、どれほど華奢なものであったかを知らされた。灰色の景色に彼女が溶け込むその時まで、僕はただ彼女の影を追い続ける。夕陽を切り取ったような翡翠の髪も、透き通るような碧眼も、その全てが街並みの中に消えていく。吹き抜けた一陣の風が、残り香までも攫って行き、僕はまた暗闇へと手をかけた。

「ヒカル」

声に振り返っても、そこに彼女はいない。虚空は寂しさだけを記憶していた。僕は微かに口を嘲けさせる。何て愚かな事だろう。自分で選んだ事なのに、心は見えない鮮血を滴らせる。彼女は正しかった。ヒカルは確かに泣いていたのだ。この切実な感情はナミダを置いて、他にない。記憶は泣いていた。心は泣いていた。でも、体は僕のものなのだ。だから、泣かせない。弱いままのヒカルでは、彼女と告別することが出来ないから。

彼は今、どう思っているのだろう。僕を憎んでいるのだろうか。いや、おそらくそうに違いない。それでも、ヒカル　これは君が望んだ事なんだ。初恋の人を、ナオを、君はずっと心配していた。今は悲しいかもしれないが、きっと彼女は前に進むだろう。時の終えた僕達を、淡い過去に残したままに。

(おしなまのこころをこころに)

僕は眠る。暗闇と共に、この世界。

時の足音が、駆け足だけをめぐらせて。

僅かな心音は、やがてゆっくり、次第に弱く。

寄り添うように、鳴り響く。

チクタク、チクタク……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4352i/>

クロガネのi アイ

2010年10月28日04時53分発行